



# 中国西南民族史

---

## 6.南詔国後期の対外関係①



# 吐蕃・唐朝と南詔国の三国関係①

## 吐蕃→南詔国

- 「贊普鍾」「日東王」の称号を与えるが、  
実際は属国扱い(人員・物資の徴発)
- 雲南西北部に直接進出、  
反蒙氏勢力(旧三浪詔など)も支配下に置く



# 吐蕃・唐朝と南詔国の三国関係②

## 唐→南詔国

- 安史の乱後，雲南に直接進出する余裕はなし
- ただし韋皋のもとで西川節度使は軍閥化，吐蕃に対抗する強力な軍事力となりうる

## 韋皋→南詔国

- 対吐蕃戦の必要性から南詔国を優遇
  - 連年の朝貢使節受けいれ
  - 高官子弟の成都留学



# 吐蕃・唐朝と南詔国の三国関係③

## 南詔国→唐

- 唐の軍事力を借りて吐蕃に対抗
- 唐に忠誠を示すためにも戦果を挙げる必要
- 唐の冊封を受けることで蒙氏王権の裏付け
  - 吐蕃との対抗上
  - 国内の対立勢力への対抗上

→ 驃国の唐への朝貢を仲介  
(国際関係中でのステータス上昇?)

- 唐の先進文化を積極的に吸収



# 9世紀前半の推移 唐朝側

徳宗—韋皋—(東蛮)—鄭回  
李泌 異牟尋 ライン

805 徳宗崩御(正月), 韋皋死す(8月)  
(李泌は789にすでに死去)

同年 順宗退位して憲宗即位

- 憲宗の元和年間(806~820)  
→藩鎮抑圧に一定程度の成果(元和の中興)



## 9世紀前半の推移 南詔国側

808 異牟尋死す, 長男尋閣勸が継ぐ



南詔国の再帰唐を実現させた立役者が  
相次いで舞台を去る

809 尋閣勸死す・長男勸龍盛が継ぐ

816 勸龍盛を「淫逆不道」として

王嵯巔(さてん)がクーデタ発動,

勸龍盛を殺して弟勸利盛を立て, 実権掌握



# 吐蕃王朝の衰退

- ウイグルー唐ー南詔の封鎖政策により、吐蕃は国際的に孤立
- ティソン・デツェン(742-797): 仏教の国教化  
↓
- 9世紀には教団指導者が国政の頂点に立つ

846 ダルマ王暗殺とともに国中が混乱、王位継承をめぐる王家は南北2朝に分裂、国境の吐蕃軍も互いに争って潰える



# 長慶の会盟(唐蕃会盟)

821-2(長慶元-2)

唐-吐蕃間に会盟の成立

(史料6.6)



- 前後数回にわたっておこなわれた唐蕃会盟の最後のもの。以後は基本的に平和が続く



- 唐朝が南詔国との同盟関係を重視せざるをえない状況がなくなる

# ラサの大招寺



# 唐蕃会盟碑(ラサ・大招寺庭前)



唐蕃会盟碑（漢文・チベット文併記）





# 唐蕃会盟実現の余波

820 南詔国, 唐に対吐蕃作戦の再開を請う



唐側は長慶会盟の準備のさなか  
=当然黙殺される

822 「雲南入寇」

- 「入寇」とあるが段文昌(西川節度使)の使者の説得で引き返している→820年と同様の要求?



- 南詔国側は対吐蕃戦の継続を求めている



# 豊祐と杜元穎の登場

823 勸利盛死す。弟の豊祐(勸豊祐)立つ  
「勇敢にして善く其の衆を用う」

823 中書侍郎・同平章事の杜元穎, 西川節度使  
となる



- 「中書侍郎・同平章事(同中書門下平章事)」  
=唐後期の宰相の肩書
- 西川は韋皋死後の混乱を経て順地化, エリート官僚  
の出世コースに組み入れられる



# 杜元穎治下の西川(成都府)

- 元穎:元宰相・文人／軍事には不案内  
「専ら蓄積に努め,士卒の衣糧を減削す。西南戍邊の卒,衣食足らず,皆蛮境に入り,鈔盜して以って自給す。蛮人かえって衣食をもってこれに資す。**是れより蜀中の虚実動静,蛮皆なこれを知る**」
  - 王嵯巔:四川侵攻を計画  
「南詔嵯巔より大挙入寇せんことを謀る。辺州しばしばもって告ぐるも,元穎これを信ぜず」
- 太和3年(829)に西川に侵攻



# 南詔軍の成都侵攻(829)

11月 王嵯巔の率いる南詔軍, 唐の領域に侵入

「蛮は蜀卒をもって郷導となす」

＝困窮した辺境の兵が南詔軍を引き込んだ

12月 成都城内に侵入

「蛮成都の西郭に留まること十日, 其の始めは蜀人を慰撫し, 市肆安堵す。将(まさ)に行かんとするに, 乃ち大いに子女・百工数万人及び珍貨を掠して去る」

これ以後南詔国の手工業, 大いに発達?

# 王嵯巔軍の径路



成都府

邛州

雅州

岷

江

黎州

大渡河

嵩州

金沙江(泸水)

会川都督

陽苴城

弄棟節度

柘東節度

# 大渡河



'93 8 17 1

# 昆明から成都へ向かう鉄道(1993)





# 成都侵攻の残したものの①

- 王嵯巔と節度使郭釗の間に和約(相互不可侵)  
唐から南詔国(王嵯巔)に国信を賜う



唐側に雲南対策の重要性を再認識させる  
ことには成功

- 王嵯巔の権勢ますます増大?
  - 唐宋史料にはこの後登場しない
  - 『南詔野史』では豊祐一代の実権を掌握,  
世隆即位後に殺される



## 成都侵攻の残したものの②

830 郭釗に代わり李徳裕が西川節度使となる

- 「籌辺楼」を作り, 詳細な地図を作製  
「南入南詔, 西達吐蕃」
- 辺境に詳しい兵士から情報収集  
「未だ月を躡(こ)えずして, 皆な身(み)ずから嘗て  
渉歴するがごとし」



南詔国に対する徹底的な防衛体制を固める



# その後の唐－南詔国関係

- これ以後も南詔→唐の朝貢は継続する  
→南詔国にとって唐朝との関係は不可欠
- 円仁の記録:開成4年(839)正月の朝賀で  
南詔国の序列は(日本を抜いて)諸国の第1位  
→唐朝にとっての成都の重要性  
(長安有事の際の朝廷の避難場所)も考慮すべき?